

1. 登山記録

D 1 か ら G 1 へ

北村 俊之

昨年の3月から7月にかけて、私は、小西浩文氏と2人で、ダウラギリI峰(D1)と、ガッシャブルムI峰(G1)の2つの八千m峰を登りました。両峰共、隊員は2人だけの小さな隊でしたが、ハイポーターを使い(D1では2人、G1では1人)、フィックスロープを張り、荷上げを行いながら、ハイキャンプを進めていく、オーソドックスな極地法登山でした。無酸素でしたが、八千m峰の中でも低い部類のこれらの山では、それが一般的です。登ったルートも、いわゆる「ノーマル・ルート」と呼ばれる、最も容易なルートでしたが、結果として、D1はBC建設より登頂まで2ヶ月以上もかかり、G1は、キャラバン開始後14日目、BCを出発後7～8日目と大変早く登ることができました。この理由は、(1)安定した天候と雪質、(2)他隊の協力(フィックスロープ、合同でのアタックなど)、(3)事前に得ていた高所順応、等が挙げられると思います。以下簡単に両峰の登山日程・概要を述べます。

1. ダウラギリI峰北東稜

3月5日 小西日本出発。エベレスト周辺へ高所順応へ。

3月21日 北村日本出発。

3月28日 小西及びハイポーター、コックはヘリコプターにてBC(4,700m)に入り、北村はルクラよりキャラバン開始。

3月29日～4月12日 北村はBCへとキャラバン、最後の村マルファから奥は、五千m以上の峠2つを越えねばならず、多量の積雪の為、ポーターには不可能、やむなく、キッチンボーイと2人で30kgのザックを背に、腰までのラッセルを繰り返す、6泊7日のテント泊でようやくBCに到着。まるで冬の剣の様だった。この間小西は、シェルパと共にBC建設、C1(5,800m)へのルート工作を開始するも、連日の降雪で苦勞し、4月10日ようやくC1に到達する。

4月22日 小西、ハイポーターC2(6,500m)到達。

4月27日 小西、ハイポーターC3予定地(7,350m)到達。この日、2番目にBC入り(ミャグディ・コーラよりキャラバン)した韓国隊が登頂成功。北村は不調で、C2でもたつく。

4月13日～5月24日 この間、3回アタックをかけるが、私の不調、悪天候などで敗退、七千m台に一度到達したのみで終わる。

5月28日 C3(7,350m)に入る。他隊は全て去り、残るは我らのみ。前日、雪に埋没したフィックスロープ掘り出しの為、C2より7,100mまで往復し、この日ようやくC3を作る。

1. 登山記録

- 5月29日 C4 (7,600m)に入る。疲れの為、C3を少し上部に移動して、C4を作るにとどまる。
- 5月30日 C4 停滞。一度アタックに出たが、闇と深雪の為、ルートを見失い、天候も悪化したので、C4に戻り停滞とする。
- 5月31日 登頂成功。C4 発4時45分、頂上着19時頃、C4 帰着翌日2時30分。長いアタックだった。下降は私がバテたので、アンザイレンし、延々とスタカット、スタンディングアックスビレイの繰り返しで降りた。ハイポーター1名と共に3名で登頂した。
- 6月9日 カトマンズ帰着。帰路は荷物のキャラバンをコックに任せ、我々はハイポーターと共に、再び雪の峠を越えてマルファに出て、ジョムソンより飛行機でカトマンズに戻った。
- 6月15日 日本帰着。余りにも疲れたので、一旦休養の為戻る。

2. ガッシャブルムI峰北面日本ルート

- 6月23日 日本出発。一週間足らずの休養を絡え、再びパキスタンへ向かう。当初の予定より1ヶ月遅れである。
- 6月30日 夜スカルド到着。パキスタン入りしてからも、悪天候によるフライト・キャンセル、レディース・フィンガーでの松岡氏の遭難事故の為のフンザへの立ち寄りなどで、スケジュールが遅れた。
- 7月3日～7月7日 最奥の村アスコレーより、バルトロ氷河をたどり、BCへとキャラバン。通常は、レスト日を含めて10日間かかる行程を、とにかく飛ばして5日間でBCに入る。ポーター達にスーパー・エクストラ・チャージを払わねばならないのも痛かったが、日本からカゼを引きずってきた私は、体調が悪く、青色吐息でどうにかBCまで付いて行くが、発熱してダウン。ガッシャブルムBCは、大部隊のテント村でギッシリの過密状態。遅れてBC入りした我々のBCの位置は、もちろん最下部で、最上部の隊のBCまでは、歩いて30分近くかかる所だった。すぐ横が、我々を独立メンバーとして認め、登山申請上では1つの隊のメンバーとして受け入れて下さった、JFMA隊（常陸民生隊長ら4名）と、我々と同じく2名だけの隊の木村功二郎ペアのBCだった。標高は約5,100m。
- 7月9日 小西とハイポーターは、C1 (5,900m)へ荷上げ、小西氏はそのままC1泊。
- 7月10日 北村とハイポーターはC1へ荷上げ、北村はそのままC1泊。BC～C1間の氷河は大変悪く、危険で、前日夜にも韓国隊の女性が、ヒドン・クレバスに落ち、小西はその救援にあたった。
- 7月11日 小西はC2 (6,400m)に入る。テントは、D1登山中に親しくなった韓国のヒマラヤン・クライマー朴英碩氏が参加している韓国学生山岳連盟隊が、C2に残置したテントを借りることができ、助かった。北村は共に出発するも不調で、途中よりC1に戻る。

1. 登山記録

- 7月12日 北村もC2に入る。ハイポーターは、BCよりC2まで一気に荷上げし、C1に戻って泊まり、翌日C2に入り、以後アタックまでずっと行動を共にした。
- 7月14日 ジャパニーズ・クロアールを登りC3(7,300m)を目指す。しかし、荷物の重さにメゲて7,150mを仮C3として泊まる。JFMA隊4名と彼らのハイポーター1名を合わせ、8名で行動を共にした。
- 7月15日 テントを7,300mに移動し最終キャンプとする。またしても韓国隊の残置テントを、雪から掘り出して使用でき、ゆったりと休めるのがありがたかった。
- 7月16日 頂上アタック。JFMA隊と韓国隊が先行し、我々もすぐ後を追う。D1のアタックと異なり、雪は締まっており、急な斜面には今シーズン初登頂した群馬岳連隊のフィックスロープが張られており大変登り易い。結局、JFMA隊の2名が終始先行して登頂し、韓国隊は途中であきらめ、我々は13時30分頃登頂した。晴れていたが、すごい強風であった。登りも下りも、フィックスが張られている様な急斜面は、自分達のロープでアンザイレンして確保し合い、慎重に下った。キャラバン開始後二週間、この日までずっと好天が続いた。
- 7月17日～7月19日 撤収しながらBCへ下降する。余りに好天が持続したため、C1からBC間氷河はクレバスだらけとなり、転落事故も再び発生。我々は、なんとか落ちずに、BCまで戻れた。
- 7月24日～7月27日 帰路キャラバン。ようやくやってきた悪天候を、BCでやり過ごした後、帰路も飛ばして4日間でスカルドに戻る。今年は、異常なまでの好天続きで、このバルトロ地域では、氷河の氷が溶け過ぎて、川が洪水を起こし、麓の村が押し流されるという災害を出す程であった。

小人数でのヒマラヤ登山は、登山活動以外の諸手続きやキャラバンなどでは、個人にかかる負担が大きく、大変である。またた金銭的にも、恐るべき高額の登山料が、隊員頭割の金額で重くのしかかってくる。今回我々が、G1登山でJFMA隊に加えていただいたのは、その一つの解決方法である。(ヨーロッパを初め、他の国々のヒマラヤニストの間では、この「ジョイント」方式が、一般的になりつつある。)しかし一旦登山活動に入ってしまうと、足のそろった、気の合う仲間との登山は、国内のクライミングと変わらない気安さで、本当に登る事を楽しめると思う。大部隊だと長時間を要する重要な意志決定、例えばアタックの出発・中止なども、瞬時にして決まってしまう。もちろん、意見がどうしてもかみ合わない相手と、組んでしまったりすれば、悲惨な結末となってしまうが・・・。今回小西氏と私は、ヒマラヤはおろか、海外でも国内でも、一度も一緒に山を登った事が無い間柄だった。性格的にも、全く異なった2人だったが、「何がなんでも登った」という強烈なモチベー

1. 登山記録

ジョンは、2人に共通していたし、私は小西氏のヒマラヤニストとしての力量を信頼していたため、うまく行ったと思う。ともあれ、これからも、大規模な遠征隊が掲げる「看板」に惑わされる事無く、良い仲間達と、海外の高峰を楽しんで行きたいと思います。

(ガイアアルパインクラブ)